

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：34320

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25750379

研究課題名(和文) 子どもの遊びを育む保育環境 想定外を生かす環境構成

研究課題名(英文) Physical Environment in Early Childhood Settings to Foster Children's Play:
Environmental Setups to Respect Unexpected Interactions

研究代表者

松井 愛奈 (MATSUI, Mana)

京都文教大学・臨床心理学部・准教授

研究者番号：40377007

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： 幼児による保育環境の想定外の使い方について、日本およびニュージーランド(NZ)の保育施設における観察と質問紙調査により検討した。想定外の使い方により本来の想定との「ずれ」が生じ、視覚的刺激となって遊びが浮き彫りとなること、子どもの発想力を軸としながら、「物とかかわる経験」「創意工夫」「おもしろさ」「遊びの広がり」「遊びの盛り上がり」「園の遊び文化として定着する可能性」が生まれることが見出された。子どもの発想の尊重と安全管理への責任など、保育者はときに迷い葛藤を抱きつつ、想定外の使い方を認めるか否かを判断し対応していた。また、日本よりNZの方が想定外の使い方に対応していることも示唆された。

研究成果の概要(英文)： The present study investigated children's unexpected interactions with physical environment in early childhood education(ECE) settings by observations and questionnaires in Japan and New Zealand(NZ). Children often showed unexpected interactions with environment, which were revealed to generate deviations from those originally intended, and to serve as a visual stimulant to highlight the play. With the children's imaginative mindset as a basis, those interactions also became the sources of experience with objects, ingenuity, amusement, diffusion of play, progression of play, and a potential base for a new play culture of the ECE center. When teachers decided whether to accept the unexpected interactions, they occasionally felt conflicts between their wish to respect children's ideas and their responsibilities to protect children's safety. It was also suggested that the teachers in NZ were more likely than Japanese teachers to permit child's unexpected interactions with environment.

研究分野： 保育学、発達心理学

キーワード： 保育環境 想定外 子ども 遊び 発想 保育者 対応 理由

1. 研究開始当初の背景

(1) 環境を通して行う保育の重要性と園環境のあり方

環境を通して行う保育の重要性は自明であり、子どもが自ら意欲をもって環境にかかわり、様々な経験を積んでいけるよう計画的に環境を構成することが求められている。園環境のあり方として、無藤・倉持・柴坂・田代・中島・柴崎(1993)は、以下の3点を挙げている。(1)様々な形で区切られ、集中が可能でありながら、お互いの空間の交錯と交流が可能である(2)空間の中に様々な形で驚きがあり、空間要素そのものが発達し子どもの遊びを刺激する(3)様々な環境要素から子どもが選び出し、組み合わせることができることと同時に、環境要素そのものを子どもが作り出し様々な形で後に残るように子どもが作り出すことができる。しかし、これは抽象的なレベルにとどまり、保育現場で実際にこの概念を応用するための具体的な手がかりはつかみにくい。

(2) 想定外の環境利用

園空間において、本来の想定とは異なる使われ方が見られる(無藤ら、1993)ことや、本来通路ではない場所を子どもが繰り返し通って道になった子ども道(福田・無藤・向山、2002)など、子どもが大人にはない発想で環境を利用している事実は見出されている。また、子どもの遊びに多く見られる「名の無い遊び」(塩川、2006)にも、想定外の環境利用の例があげられており、子どもが既存の物の特性に縛られず、主体性や創造性を発揮していることが言及されているが、保育環境との関連性は詳細に検討されていない。

2. 研究の目的

(1) 保育における子どもと物理的環境とのかかわりについて、「想定外の使い方」が生じる様相を詳細に把握する。

(2) (1)について、多面的かつ発達的な意義をおさえ、想定外を捉える枠組みを構築する。

(3) 環境構成における保育者の意図と、実際の子どもの遊びとの一致/不一致(想定外)の状況、想定外が生じた場合の保育者の考え方と対応を捉える。

(4) (1)~(3)を統合し、頻繁に起こる想定外を生かし、子どもの豊かな遊びを育む保育環境を構成するための具体的指標を作成する。

3. 研究の方法

保育における子どもおよび保育者の行動観察調査および、保育者に対する質問紙調査を実施することにより、子どもと保育者双方から、子どもの発達にふさわしい保育環境の

あり方を複眼的に捉える。国内の保育所/幼稚園、および、幼保一元化が完了しており、日本でも重要な示唆を得られるとして注目されているニュージーランド(NZ)の保育施設における調査を実施し、日本と比較検討を行う。

(1) 日本国内における研究

保育所における縦断的観察調査

2013年5月~2016年3月、2週間に1回程度、私立保育所1園において、VTR・写真撮影および筆記記録による保育の自然観察を実施した。対象者は2歳児1クラスで、3年間縦断的に追跡した(2016年3月時点で4歳児クラス在籍)。

幼稚園における継続的観察調査

2013年度を中心に計20回、私立幼稚園1園において、自然豊かな園庭全体を使った遊びが実施される際に、写真撮影および筆記記録による保育の自然観察を実施した。

幼稚園・保育所における短期的観察調査

2013年8月、私立保育所1園において、VTR・写真撮影および筆記記録による2日間の保育観察調査を実施した。また、2013~2015年度において毎年、複数の幼稚園における公開保育に参加した。

幼稚園・保育所における質問紙調査

2013年3月~5月、A県私立保育所2園、B県私立幼稚園1園において、想定外の使い方に対する保育者の対応や考えを把握するための質問紙調査を実施した(回収数は計46)。

(2) NZにおける研究

観察調査・インタビュー調査

2014年8月、NZ南島にある保育施設6園、小学校1校において、観察調査、インタビュー調査を実施した。各園の方針に基づき、VTR撮影、写真撮影の可能なものを選択し、筆記記録を併用した。また、元小学校校長、医師かつ言語聴覚士、元保育者の計3名に個別インタビュー調査を実施した。2地域における公園の環境観察調査も実施した。

質問紙調査

2014年8月、NZ南島にある保育施設6園に配布した(回収数は計23)。質問紙の内容は、2013年に国内で実施したものの英訳版である(NZの文化に合わない点については一部改変した)。

4. 研究成果

(1) 想定外の使い方を捉える枠組み

想定外の使い方により、本来の想定との「ずれ」が生じ、視覚的刺激となってその想定外の使い方をういた遊びが浮き彫りになる。そして、子どもの発想力を軸としながら以下の6点が生み出されることが見出された(図1参照)。

物とかがわる経験

2歳児前半においては、一人遊びで想定外の使い方(手で土をつかんでスコップにつめ

ていく等)が生じており、さまざまなやり方で物とかかわる経験を積み、物に熟知していく過程にあると言える。

創意工夫

既存の物の使い方にしばられない創意工夫により、多種多様な遊びの展開が可能となる。

おもしろさ

これまで経験のない/少ないおもしろさが生まれる。そのおもしろさを、一人で、あるいは他の子どもと共有して楽しむことができる。

遊びの広がり

ある子どもが始めた想定外の使い方を、周りの子どもも同じように行って遊びが広がることが見られた。それにより、相互作用のきっかけ(松井・無藤・門山, 2001)となり、一時的であれ子ども同士のかかわりが生まれる可能性がある。

遊びの盛り上がり

いざこざが生じていたが、想定外の使い方により一転笑いを伴いながら新たな方向性で遊びが継続する、ごっこ遊びに新たなテーマが加わるなど、すでに展開している遊びが盛り上がることも見られた。すでに2人以上で遊んでいる遊び集団内で想定外の使い方が生じ、その使い方が集団メンバーに広まる割合は、2歳児~4歳児において年齢とともに増加傾向にあった。

園の遊び文化として定着する可能性

想定外の使い方が次第に広まり、繰り返され、園の遊び文化のひとつとして定着していくものもあると考えられる(例:虫かごの代わりにバケツとふるいを使用する等)。

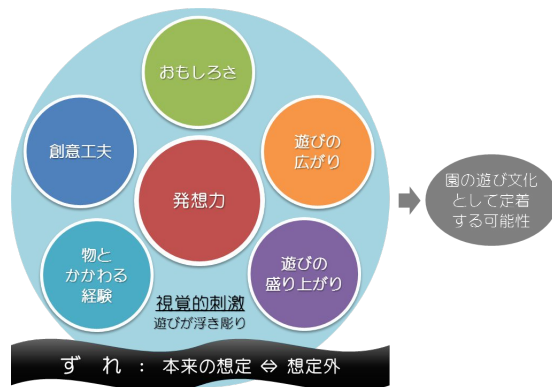


図1 想定外の使い方により生まれるもの

また、想定外の使い方に対して保育者の制止が見られたのは、ベンチの上を歩いている2例(2歳児/理由:危険)、空き箱類を入れておくダンボール箱の中に入り込んでいる1例(3歳児/理由:園のルール)合計3例のみであった。安全が保障されていれば、子どもの発想を尊重し、想定外の使い方が認められることが多いと言える。

(2) 子どもによる想定外の認識

想定外の使い方をしながら笑いを伴う、そ

の使い方を周囲にアピールする事例があり、その際、子どもたちにおいても想定外の認識があることが示唆される。それにより、想定外の使い方が周囲に明示的に提示される、あるいは暗黙的に伝わり、子ども同士のかかわりや遊びの展開へとつながる可能性がある。

(3) 想定外の使い方に対する保育者の考え:

日本・NZ比較

5場面における比較

幼児による保育環境の想定外の使い方5場面(すべり台の逆さのぼり/ごっこ遊びで絵本を間仕切りとして使用/タンパリンを靴として使用/ままごとの食材としてぬいぐるみを使用/土などを入れて運ぶ手押し車へ乗り込み)に対して、日本およびNZの保育者はどのような理由でどのように対応するかについて質問紙調査を実施した。全体的に日本よりNZの方が想定外の使い方を認める割合が高く、最も大きな差が見出されたのは「ままごとの食材としてぬいぐるみを使用」する場面であった。日本ではぬいぐるみを擬人化して捉え、食材としての抵抗感が強く、認めないことが多いが、NZにおいては狩猟により動物を料理して食べるなど、子どものもつ文化的背景を考慮することの重要性を理由として、1例をのぞきすべて認められていた。

各場面において、認める/認めない理由が分類され、認める理由については両国間に差は見出されなかったが、認めない理由について「絵本を間仕切りとして使用:絵本」「タンパリンを靴として使用:タンパリン」において差が見出された。日本では、絵本・タンパリン双方において、絵本が破れる/タンパリンが壊れるなど「破損」を理由として挙げることで、絵本は読むもの/タンパリンは楽器など「本来の使い方遵守」という理由を挙げることの方が多かった。NZでは、絵本について「本来の使い方遵守」と「破損」という理由で大差はなく、タンパリンについて「本来の使い方遵守」より「破損」を理由として挙げることの方が多かった。

想定外の使い方に対する考え方

想定外の使い方全般に対する考え方について、肯定的な意見として「発想の豊かさ」「学びの機会」「リスクや困難の必要性」「危険がなければ容認」、否定的な意見として「安全管理」「集団生活のルール」「正しい/大切な扱い」、判断に関する意見として「可否判断の迷いや難しさ」「判断基準統一の必要性」という9カテゴリーに分類された。

NZでは「想定外のことは毎日起こり、価値をにおいて大切にしている」「自由に解釈して創造的に使える教材を意図的に用意している」「介入するのは安全性の問題がある場合のみ」「健康/安全が損なわれなければ、想像的、創造的、表現豊かにどんな形で使用してもよい」など、安全性の確保がなされていれば、想定外の使い方を肯定的に捉える意

見が大半であった。全般的に、日本と比べてNZの方が想定外の使い方に対して寛容であることが示唆される。

日本においてはNZと同様、子どもの発想のおもしろさや、想定外の使い方から遊びを広げていける可能性など肯定的に捉える一方で、NZでは言及されなかった「どこまで想定外の使い方を認めてよいのか判断が難しく迷う」ことや、「保育者間で想定外の使い方を認める／認めない判断基準の統一の必要性」が述べられていたことが特徴的である。また、安全管理のために、集団生活を送るうえでは想定外の使い方を認めにくいことについての言及も見られた。

さらに、NZでは「リスクを経験」することの重要性についても述べられており、日本には見られない記述であった。NZの保育者は、「リスクを経験すること、そこから自ら考える」ことも重視し、「他者を傷つけたり、悪影響を及ぼしたりする場合には、自分の行為がもたらす結果について知る必要があるが、保育者が見守っている場合は楽しむことができ、それを許容することが子どもにとって最もよい」など、保育者がある場で見守り安全管理ができるのであれば、日本と比べて想定外の使い方を容認する傾向が高いことが読み取れる。

ここで、子どもの遊びを見守ることに關して、安全確保につながる保育者の配置基準に着目する必要がある。例えば保育所における保育者1人あたりの子どもの人数は、日本では0歳児3人、1・2歳児6人、3歳児20人、4歳児以上30人であるのに対して、NZにおいては、2歳未満児5人、2歳以上児10人である。0歳児については日本の方が手厚いが、歩行を始め動きが活発になっていく1歳児以上については、保育者1人あたりの子どもの数はNZの方が少なく目が行き届く。日本においては、保育者1人が受け持つ子どもの数が多すぎるため安全管理が十分にできず、子どもの発想の豊かさを認め、想定外の使い方を許容したくてもできない状況が生まれている可能性が示唆される。

(4) 想定外を生かす保育環境構成のための具体的な指標

上述したように、想定外の使い方に対する保育者の考え方や対応において、肯定的な意見と否定的な意見との間で、ときに迷いや葛藤がありながら、その場に応じて想定外の使い方を認めるか否かの判断がなされていることが見出された。また、子どもが始めた想定外の使い方そのままでは認められないものの、子どもの発想は尊重して代替案を提示するという回答も多く見られた。(図2参照)

想定外の使い方を認めるうえで、安全面の確保は不可欠である。一方で制止する場合、それがどの程度危険なのかについては検討の余地があり、もし子どもの発達に必要なリスクであれば許容していくことも重要であ

らう。園のルール上制止することになっている場合にも、一律に制止することで子どもの発想を生かした遊びを展開する機会を奪っていないか、使い方を認めていける方法はないか等を吟味することで、ルールの妥当性を再検討することができるだろう。以上の枠組みをもとに、想定外を生かす環境構成のためのさらに細かい指標作成に向けて、保育方針や環境の異なる多種多様な園において調査を進めていくことが今後の課題として残される。

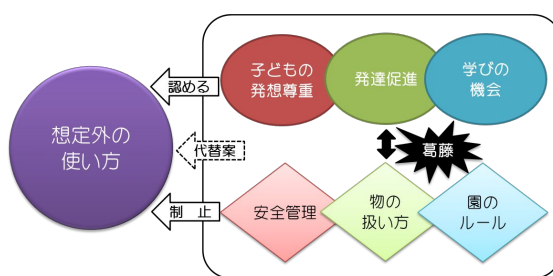


図2 想定外の使い方に対する保育者の考え・対応

<引用文献>

- 福田秀子・無藤隆・向山陽子 2002 園舎・園庭の改善を通しての保育実践の変容(III): 研究者と保育者によるアクションリサーチの試み. 日本保育学会大会研究論文集(55). 786-787
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦 2001 幼児の仲間との相互作用のきっかけ: 幼稚園における自由遊び場面の検討. 発達心理学研究 第12巻、第3号、195-205
- 無藤隆・倉持清美・柴坂寿子・田代和美・中島・寿子・柴崎正行 1993 園環境は子どもにとってどのような意味を持つか. 保育学研究 第31巻、113-122
- 塩川寿平 2006 名のない遊び. フレーベル館

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

松井愛奈、幼児による保育環境の想定外の使い方 日本とニュージーランドの保育者はどのように捉えるか、京都文教大学心理社会的支援研究、査読有、第6集、2016、21-32

〔学会発表〕(計 6 件)

松井愛奈、保育環境における想定外の使い方 保育者の対応とその理由、日本乳幼児教育学会第23回大会 口頭発表、2013年11月23日、千葉大学

松井愛奈、保育における物理的環境と想定外の使い方、日本発達心理学会第25回大会 ポスター発表、2014年3月21日、京都大学

松井愛奈、子どもが見出す・つくり出す保育環境 「想定外」の使い方(2)、日本保育学会第67回大会 ポスター発表、2014

年 5 月 17 日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学

松井愛奈、保育における物理的環境と想定外の使い方(2) ニュージーランドの保育者に対する質問紙調査、日本発達心理学会第 26 回大会 ポスター発表、2015 年 3 月 21 日、東京大学

松井愛奈、子どもが見出す・つくり出す保育環境 「想定外」の使い方(3)、日本保育学会第 68 回大会 ポスター発表、2015 年 5 月 9 日、杉山女学園大学

松井愛奈、子どもが見出す・つくり出す保育環境 「想定外」の使い方(4)、日本保育学会第 69 回大会 ポスター発表、2016 年 5 月 7 日、東京学芸大学

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

松井愛奈 (MATSUI , Mana)

京都文教大学・臨床心理学部・准教授

研究者番号 : 4 0 3 7 7 0 0 7

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし